

オープンラテン部門出場

名越慎吾・明子組

この度 j. a. 1 様より遠征支援頂き、2018 年度ブラックプール・アマチュアラテンの部に出場しました。ご支援いただきました j. a. 1 様、誠にありがとうございました。

今回の遠征は自分たちにとって非常に学ぶものが多い遠征となりました。前回（2015 年）アマチュアラテンの部に出場した際は 144 位という結果で、あと一歩で Top140 入りも本戦出場も逃してしまうという悔しいものでした。そ

こで、今回こそは絶対に本戦に進み、ウィンターガーデンのフロアで生バンドで踊るぞ！という目標をもって今大会に挑みました。この目標を達成させるため、私達は、ただ練習し踊るだけではなく、よりアピールできるルーティンへの見直しや身体の伸びやかさを表現するためのストレッチ、力強さを出すための筋肉トレーニングも実施し、ブラックプールの会場へと向かいました。しかし、結果は、前回より大きく順位を落とすという不甲斐なく、非常に悔しい結果となってしまいました。早々に競技会が終わってしまったので、その後は自分たちが上がれなかったラウンドに上がった選手達はどんな踊りをしているのかを知りたくて、しっかり観戦してきました。正直、次のラウンドには上がれても良かったんじゃないか？という気持ちと、上がったとしても間違いなく下位グループだっただろうという複雑な気持ちでいっぱいになりました。実際に、自分の目で観戦した感想は、ここ数年ブラックプールを含め様々な海外試合に出場してきましたが、アジア勢、特に中国勢のダンスが世界に通用するものへと進化してきているように感じる一方、自分達のダンスはその進化から取り残されているように感じさせられました。実際、U-21 ラテンの部で中国の選手が優勝したことが一つの時代の幕開けのようで印象的でした。

「WDSF はスポーツ性に特化し WDC は芸術性に特化しているため、両方の団体に出場する選手はそれぞれの団体でダンスの表現を変えなければならない」という意見を聞きますが、正直、どの団体主催の試合でもス



ピードや力強さ、基礎的な動きの美しさに加え、目を引くトリッキーなルーティン、観客へのホットなアピールなど、スポーツ性も評価の上で大事な要素になってきていると感じました。そして、海外の選手たちは、このような表現を体現させるためにも徹底した基礎トレーニング・ベーシックムーブメントを意識して練習しているのだろうと感じさせられるダンスを目の当たりにしました。

また、競技会の合間にフロアが開放される時の練習時間はとても貴重な経験でした。大勢のトップ選手が踊る中、隣りで踊る選手は、どんな練習をしているんだろう？どんなムーブメントで表現しているんだろう？と視覚的に受け取りながら練習することは、自分達のレベルを格段にあげられるような感覚がありました。そして、レベルの高い競技会を観戦し、トップレベルの選手たちの表現などのイメージを持ったまま取り組む練習は、普段の何倍もの効果があると感じました。

日本では、なかなかこういった経験をすることは難しく、特に普段私達が練習している練習場には競技選手が少なく、トップレベルの選手たちと自分達の踊りを比較しながら練習する機会が少ないので、こういった機会を頂けたことに本当に感謝しています。

昔に比べて動画サイトや SNS で海外選手のダンスを見ることが出来るようになっていますが、実際にレベルの高い海外の試合に出場し、海外選手達のパワーやスピードなど肌で感じることができ、得るもの

が非常に多かった遠征でした。サラリーマンダンサーである 私達にとっては、海外戦に出場するための時間とお金の工面は大変なことです、出来る限り高いレベルの環境に身を置く事が上達の近道なのではないかと感じているので、これからも名越組は世界に挑戦し続けます。